

N P O 法人・越谷市郷土研究会
第 4 9 6 回 史 跡 め ぐ り
今大沸騰中の江戸最古を誇る七福神を訪ねる

『谷中七福神めぐり』

集合時間と集合場所 8 : 1 0 北越谷駅西口 (始発電車)

※現地は道路が人で大混雑し、拝観寺では大変な長蛇の列が予想。誠に恐縮ですが、

拝観寺では提示カードで補い場所確認と簡単な説明になります。ご了承ください。

コース 北越谷駅⇒日暮里駅⇒田端駅 (南口) ⇒不動坂 (田端村の文士が通った坂道)
とうがくじ どうかんやま
⇒東覚寺 (①福祿寿・赤紙不動) ⇒谷田川通り⇒道灌山 (江戸市民の行楽地)
ろくあみだみち せいうんじ しゅしょういん
⇒ひぐらし坂⇒六阿弥陀道⇒青雲寺 (②恵比寿・舟つなぎの松) ⇒修性院
きょうおうじ せん
(③布袋尊) ⇒夕焼けだんだん (延命院貝塚) ⇒経王寺の弾痕跡⇒笠森お仙
ちようあんじ てんのうじ
(笠森稻荷) ⇒長安寺 (④寿老人・狩野芳崖) ⇒天王寺 (⑤毘沙門天・大仏)
やなか ごくいん くらやみざか
⇒谷中五重塔跡⇒長谷川一夫・毒婦お伝の墓⇒護国院 (⑥大黒天) ⇒暗闇坂⇒
しのばずのいけ
森鷗外旧居跡⇒不 忍 池 弁天堂 (⑦弁財天) 《広場解散 13 : 30》 徒歩 4. 8 km

《七福神めぐり中の緊急連絡先 ナンバーカード記載の新井携帯にお願いします》

案内者 : 1 班 : 顧問 加藤幸一、 2 班 : 実行委員 新田竹明、 3 班 : 理事 大野悦治



護国院所蔵の色紙より取得

谷中七福神を詣でる

加藤幸一

谷中の地名の語源…上野台地と本郷台地の間の低地を本来は指していたと推測。

江戸最古の谷中七福神

谷中七福神は、宝暦年間（一七五一〜六四）に始まり、江戸最古であるとされる。

谷中七福神は、「谷中七福神『江戸歴史散歩』（江戸歴史散歩の会）によると、今の組み合わせが江戸時代から続いてきたわけではなく、江戸時代は今とは一部違った組み合わせが見られていたようである。その例として経王寺の大黒天があげられる。

田端文士村記念館（入館無料・月曜と年末年始は休館） 北区田端六の一の二

明治中期まで田端は閑静な農村でしたが、明治二十二年、上野に東京美術学校（現、芸大）が開校されると、徐々にその姿を変えていきます。上野とは台地続きで便が良かったことなどから、美校を目指し、学び、巣立った若者たちが田端に住むようになるのです。

明治三十三年・小杉放庵、三十六年・板谷波山、四十年・吉田三郎、四十二年・香取秀真など、芸術家たちが続々と転入。画家を中心としたポプラ倶楽部も誕生するなど、田端は、さながら「芸術家村」でした。

大正三年、ひとつの転機が訪れます。学生・芥川龍之介の転入です。五年には室生犀星も田端に移り住み、競うように作品を発表、名声を高めていきます。ふたりに中心に、やがて菊池寛、堀辰雄、荻原朔太郎、土屋文明らも田端に居を構えるなど、大正から昭和の初期にかけて、田端は「文士村」となったのです。

田端文士村記念館のパンフより

なお田端の街角には文士の旧居跡を示す表示もみられる。

当時の田端の様子――田園風景に文士や芸術家が住まう――

田端駅は、現在より西日暮里よりにあり、文士や芸術家たちはこの駅を利用し不動坂を上っていた。その道は、現在の田端駅寄りの歩道（切通しの東側の歩道）にほぼ相当する。田端は、江戸の町の郊外としての田園風景が広がっていた。田端駅は明治二九年にできる。

なお、現在の切通しは、昭和十年にできたもので、また現在の谷田川（やたがわ）通りは、昭和初期まで谷田川が流れていたのである。

不動坂――田端駅の南口にある文士・芸術家が通った坂――

不動坂のいわれは、坂の下に不動の滝があつて、そこに不動明王像が安置されていたことによる。美校の上野駅から乗って田端駅を出ると、文士や芸術家たちはまずこの坂を上ったのである。

たばた
田端八幡神社――赤紙仁王さんは、元はここにあった――

この八幡神社は、田端村の鎮守として崇拝された神社で、品陀和氣命（ほんだわけのみこと・応神天皇）を祭神としています。神社の伝承によれば、文治五年（一一八九）源頼朝が奥州征伐を終えて凱旋するときに鶴岡八幡宮を勧請して創建されたものとされています。別当寺は東覚寺でした。

現在東覚寺の不動堂の前にたっている一对の仁王像（赤紙仁王）は、明治元年（一八六八）の神社分離令の発令によって現在地へ移されるまでは、この神社の参道入口に立っていました。江戸時代には門が閉ざされていて、参詣者が本殿前まで進んで参詣することはできなかったらしく、仁王像のところから参拝するのが通例だったようです。

参道の中程、一の鳥居の手前には石橋が埋められています。これは昭和初期の改修工事によって暗渠となった谷田川（やたがわ）に架かっていたもので、記念保存のためにここへ移されました。

社殿は何度も火災等に遭い、焼失と再建を繰り返しましたが、平成四年（一九九二）に氏子たちの協力のもとで再建され、翌年五月に遷座祭が行われて現在の形になりました。境内には、稲荷社のほかに田端富士三峰講が奉祀する富士浅間社と三峰社があり、富士浅間社では毎年二月二十日に「富士講の初拝み」として祭事が行われています。

平成九年三月 東京都北区教育委員会

① 《福祿寿》 東覚寺――赤紙仁王さん―― とうがくじ

・赤紙仁王尊について

石仏仁王の背銘に「施主道如海上人東岳寺賢盛代、寛永十八年巳年八月二十一日」と刻まれている。西暦一六四二年より露仏で立っていることになる。仁王は本来清浄な寺院の境内を悪から守る金剛力士として門の両側に立ち仏法僧の三宝を守護するものであるが、この赤紙仁王は当時江戸市中に流行していた疫病を鎮めるため宗海上人が願主となって建立されたもので、いつのころからか赤紙（魔悪を焼除する火の色）を自分の患部と同じ箇所につけて病氣身代わりと心身安穩を願うようになった。石仁王のあらたかな靈驗に、今もなお参詣者は遠近から集まり香煙が絶えない。

右の阿像は口を大きく開け息を吸い込んでいる状態即ち「動」を表し、左の吽（うん）像は口をしつかりと結んで息を止めている状態即ち「静」を表示している。阿吽の姿は密教で説く胎藏界、金剛界の二界を表し又宇宙一切のものの始めと終わりを表している。阿像から吽像へと祈願し満願のあかつきにはお礼として草鞋（わらじ）を奉納する。祈願者、病人を見舞うため日夜歩かれるので、さぞかしわらじが必要であろうという思いやりからである。

白龍山 寿命院 東覚寺山主 合掌

阿吽の仁王様は、江戸時代は隣の田端八幡様の参道入口の門の前あった。

吽の仁王様



阿の仁王様



田端八幡と東覚寺（赤紙仁王さん）

赤紙を自分の患部に貼って病気の身代わりをし、満願のあかつきにはお礼として草鞋を奉納する。



谷田川やたがわ――現在は谷田川通り――

谷田川は、現在の谷田川通りに流れていて、谷田橋は現在の交差点にあった。その石橋は田端八幡社に移されている。

千歳湯（風呂屋）

ここは道灌山に登る入口あたりである。

どうかんやま

道灌山――上野台地の端にあつて、江戸市民の行楽地・薬草と虫聴きの名所――

西日暮里四丁目の台地は道灌山とよばれ、江戸時代には眺めがよく、筑波や日光の連山、そして下総国府台（現市川市）などをのぞむことができた。

当時は薬草が豊富で、一年中採取者が訪れたという。また、虫聴きの名所として知られ、涼を求めて人々が集まったところでもある。

安藤広重の錦絵や正岡子規の歌などによっても当時がしのばれる。

荒川区教育委員会

道灌山遺跡

昭和二十九年、弥生時代の住居跡が発掘された開成グラウンドほか、西日暮里四丁目の台地上は、縄文時代から江戸時代までの遺跡が残されている地域である。

荒川区教育委員会

西日暮里公園にある解説板より（今回はここは通らない）

道灌山は、上野から飛鳥山へと続く台地上に位置します。安政三年（一八五六）の「根岸谷中日暮里豊島辺図」では、現在の西日暮里四丁目付近にその名が記されています。この公園を含む台地上に広がる寺町あたりは、ひぐらしの里と呼ばれていました。

道灌山の地名の由来として、中世、新堀（日暮里）の土豪、関道閑（せきどうかん）が屋敷を構えたとか、江戸城を築いた太田道灌が出城（でじろ）を造った等の伝承があります。ひぐらしの里は、江戸時代、人々が日の暮れるのも忘れて四季折々の景色を楽しんだところから「新堀（にいほり）」に「日暮里」の文字をあてたといわれています。

道灌山・ひぐらしの里は、荒川区内で最も古い歴史をもつ所です。このあたりから出土した土器や、貝塚・住居址などは、縄文時代から数千年にわたって人々の営みが続けられたことを物語っています。



道灌山聴虫(どうかんやまむしきき) 江戸名所図会



道 灌 山

道灌山・ひぐらしの里は、江戸の人々の憩いの場として親しまれた。上野台地の崖ぎわは人々の行楽地で、筑波・日光の山々などを展望できた。また薬草が豊富で、多くの採取者が訪れていた。虫聴きでも知られた。左の図には、行楽の様子と虫聴きの様子が描かれている。

西日暮里駅ホームから見上げると上野台地の崖の様子がよく見られます。

元・道灌山の現地にて現在の眺めを満喫します！

② 《恵比寿》 青雲寺——船繫の松——隅田川の舟人の目印の松と金比羅さま

せいうんじ ふなつなぎ

道灌船繫松（ふなつなぎのまつ）

道灌船繫松のことは、『江戸名所図会』（天保七年刊（一八三六））に詳しく書かれています。年の秋、大風に吹き折れて、今は一本のみ残れり。（中略）

或人云（いわ）く、往昔（むかし）このふもとは豊島（としま）川に続きし入江にて、道灌の砦城（とりで）ありし頃は、米穀その外すべて運送の船より、この松を目当にせしものにて、つなぐといふもあながち繋ぎとどむるの義にはあらず、これは舟人の詞（ことば）にして、つなぐといふは目的にするなどいえるに同じ心とぞ。よってその後、道灌山の船繫の松と称して、はるかにこの所の松を目当にせしを誤りて、道灌船繫の松と唱ふるとぞ。」（略）※「豊島川は戸田川の下流にして、隅田川に続き、末は品川の海に入る大河なり。」（絵本江戸土産の第九編、隅田川の別名か。

道灌船繫松は、この絵の中で台地上に高くそびえています。安永元年（一七七二）の秋大風のため一本が折れ、残り一本になってしまったようです。（略）

道灌山の船繫松は、ここのシンボルであり、近在の人たちに親しまれ、大切にされてきました。

※舟繫の松のそばには、海上交通の守り神の金比羅様が祭られている。

現在、この碑のそばには金比羅様の石塔がある。

③ 《布袋》 修性院——日ぐらしの布袋——

しゅしょういん

修性院（しゅしょういん）の布袋は、谷中七福神の一つで、「日ぐらしの布袋」ともよばれる。谷中七福神めぐりは、江戸市中で最も古い歴史をもち、年始めにあたって江戸市民が行う年中行事の一つであった。

江戸時代の中期ごろから、このあたり一帯は俗に「ひぐらしの里」とよばれ、江戸近郊の行楽地として賑わった。ことに修性院・妙隆寺（修性院に合併）・青雲寺は、境内に多数の花樹を植えて、「花見寺」の名にふさわしい庭園をつくり、四季折々の草花を楽しむことができたという。

荒川区教育委員会

※今はなき妙隆寺は、修性院の向かって右隣（富士見坂の北側）にあった。

富士見坂——坂の上では富士山が見られる——

江戸時代からの古道。坂を上った上では富士山が大変よく見られていたが、マンション建設などの影響で見えにくくなってきた。

坂の途中に富士見坂から南西方向に見られる景色の変遷の写真が展示されている。



「日暮里惣図」(江戸名所図会、長谷川雪旦画)



舟(ふな)つなぎ松
こんぴら



碑之松舟繋里暮日

六阿弥陀道（ろくあみだみち）――この石碑は南泉寺のそばにある――

この道に沿って青雲寺、道灌山方面に北上すると、武州六阿弥陀詣での第四番にあたる与楽寺に行く。

武州六阿弥陀詣では、谷中七福神詣でよりも古く、江戸時代初期より行われていた。武州六阿弥陀詣での影響で、この谷中七福神詣でが行われたのではないかと推定されている。なお、武州六阿弥陀とは、次の通りである。

- 第一番 西福寺（さいふくじ・北区豊島）
- 第二番 延命寺の阿弥陀堂（足立区江北、南東六百m先の恵明〔えみよう〕寺に合併）
- 第三番 無量寺（北区西ヶ原）
- 第四番 与楽寺（北区田端）
- 第五番 常楽院（台東区下谷、調布市の深大寺に合併）
- 第六番 性翁寺（しょうおうじ・足立区扇）



延命院貝塚――上野台地のこのあたりの崖でみられた貝塚――

明治二十一年（一八八八）に延命院の境内の崖下（上野台地の南西部）で貝塚が発見されたので、これを「延命院貝塚」と呼ばれ、このあたりの崖でみられる縄文時代の遺跡である。

夕焼けだんだんの階段下の北側あたりのマンションの地でも延命院貝塚の一環としての貝塚が見つかっている。

夕焼けだんだん

JR「日暮里」駅から「谷中ぎんざ商店街」へと向かう途中にある階段をこのように呼ばれるようになった。「夕焼けだんだん」の名称は平成2年に石段が改装された際の愛称募集時にタウン誌「谷根千（やねせん）」の編集者である森まゆみ氏が応募して採用された名称である。

夕日のあたる頃、階段の上から夕日の沈む「谷中ぎんざ商店街」方面を見ると、そこは懐かしい昭和の光景のようであるという。

（インターネットの「夕焼けだんだん・日暮里駅・レッツエンジョイ東京」を参考にした。）



悲母観音

明治初期の日本画家である。

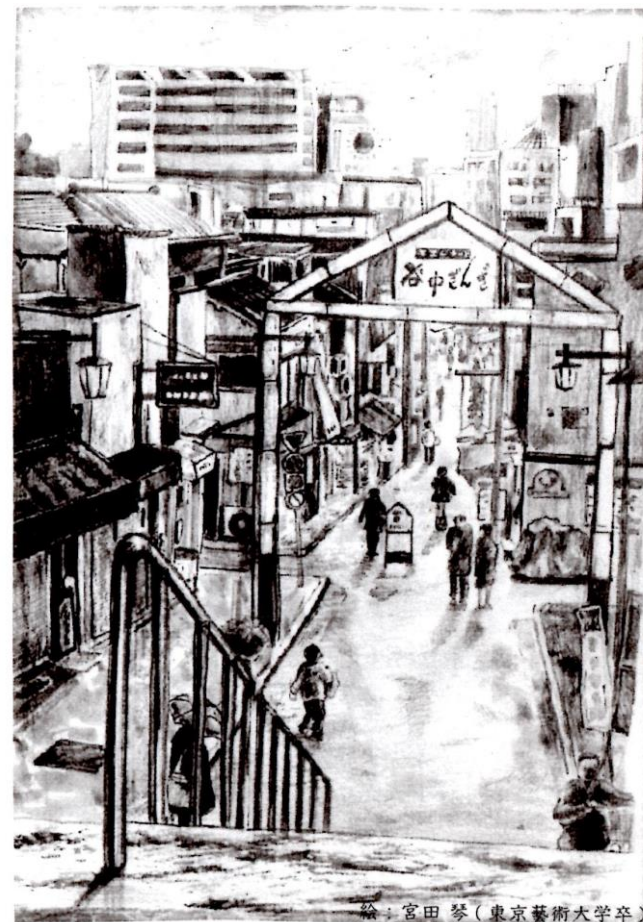
狩野芳崖墓（台東区史跡）

台東区谷中五丁目二番二十二号 長安寺

④ 《寿老人》 長安寺——狩野芳崖の墓——

慶応四年（一八六八）の上野戦争のとき敗走した彰義隊士をかくまったため、新政府軍の攻撃をうけることとなり、山門には今も銃弾の痕（あと）が残っている。谷中七福神めぐりは、現在はこちらは含まれていないが、江戸時代は大黒天を祀る寺院として、上野の護国院とともに谷中の七福神めぐりの対象に含まれていた。

経王寺の弾痕——彰義隊をかくまったお寺への新政府軍の攻撃の痕——



夕焼けだんだん

絵：宮田 琴（東京藝術大学卒）

功徳林寺の境内

くどくりんじ

お仙・笠森稻荷——笠森お仙は笠森稻荷社前の茶屋の看板娘——

「笠森お仙」は江戸谷中の笠森稻荷社前の茶屋「鍵屋」の看板娘で、浅草寺奥山の楊枝屋「柳屋」の看板娘「柳屋お藤」と人気を二分していた。鈴木春信によつて浮世絵に描かれ、「向こう横坑のお稻荷さんへ一銭あげてざつと拝んでおせんの茶屋へ」との手まり唄にも歌われた。浅草の二十軒茶屋の茶屋「葛屋（つたや）」の看板娘葛屋およしも含めて江戸の三美人の一人と称されることもあった。

笠森お仙の茶屋は、福泉院の門前にあったという。その福泉院（明治の初め頃に取り壊される）はこの明治半ばにできた功徳林寺あたりにあり、その関係で功徳林寺によつて明治四十一年・二年頃に笠森稻荷の祠が建てられたのが事実のようである。



鳥居そばの
笠森お仙
想像図

⑤ 《毘沙門天》 天王寺——釈迦如来坐像の天王寺大仏、丈六仏——

てんのうじ

明治の頃には、「天王寺大仏」として親しまれた丈六仏である。丈六仏とは、釈迦が立った時の身長が一丈六尺（4.85^{メートル}）の高さと言われ、釈迦と同じ大きさの仏像である。座った時はその二分の一の八尺（2.4^{メートル}）となる。

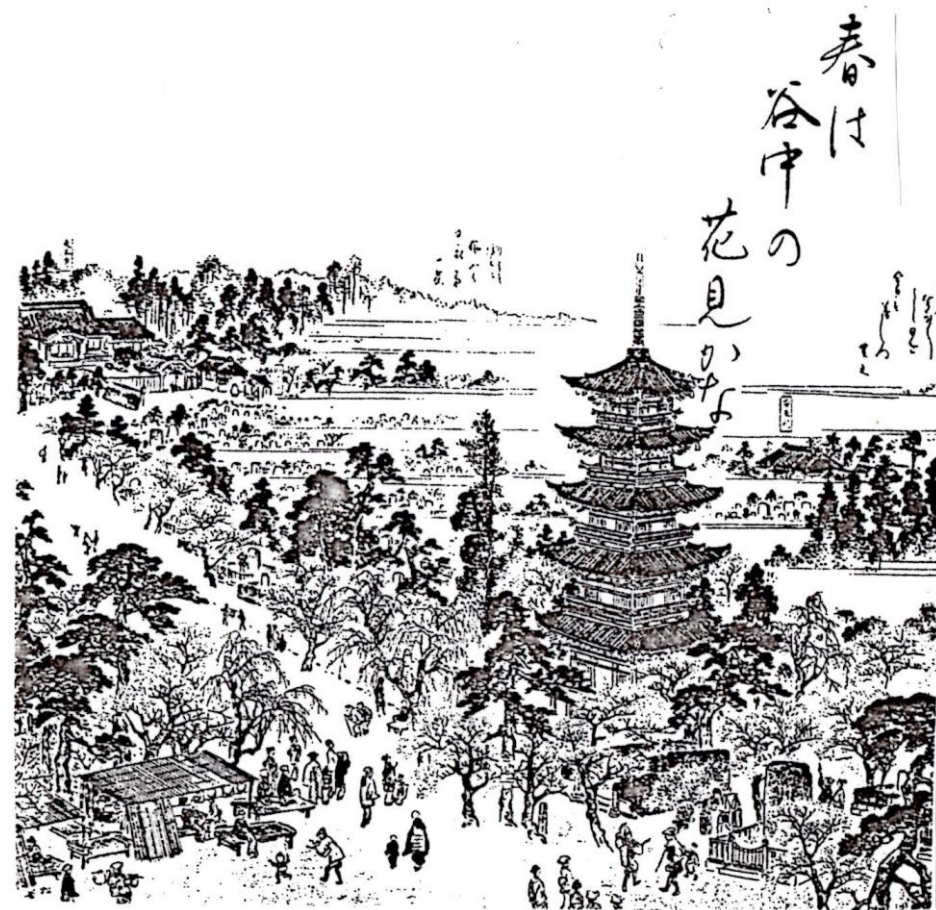
この仏像は釈迦が座った時と同じ大きさの丈六仏の坐像と言え、元禄3年（一六九〇）の制作である。仏様は我々衆生と違って、いかに大きいか実感できる。

※一丈は三メートル、一尺は三〇センチメートル、一寸は三センチメートル

てんのうじ

天王寺の五重塔跡——関東一の高さ、地元のランドマーク、放火心中で焼失——

寛政三年（一七九一）に近江国（滋賀県）高島郡の棟梁八田清兵衛ら四十八人によつて再建された五重塔は、幸田露伴の小説『五重塔』のモデルとしても知られている。総檜造りで高さ十一丈二尺八寸（三四・一八メートル）は、関東で一番高い塔であった。明治四十一年（一九〇八）六月東京市に寄贈され、震災・戦災にも遭遇せず、谷中のランドマークになっていた（以上、解説版より）。昭和三十二年七月六日午前三時四十五分頃に火の手が上がる。放火心中により焼失した。



谷中五重塔

谷中墓地

長谷川一夫の墓——銭形平次の俳優——

流し目と鼻にかかる語り口で知られ、
美男の代名詞にもなった昭和の時代劇
の大スターである。特に『銭形平次』
で有名。

現在も献花が絶えない。



川上音二郎の銅像跡地——「オツペケペツポー・ペツポー」——

新派の祖。明治の自由民権運動で活躍し、後に時世風刺や「オツペケペー節」で有名となる。

高橋お伝の墓（供養塔）——古着屋殺しの毒婦——

高橋お伝は、明治初期に古着屋吉蔵殺しの事件を起こした希代の毒婦として喧伝された女性である。明治十二年に日本で最後の斬首を執行された人物でもある。らい病にかかり身体の自由を失った夫を毒殺して逃亡したという話は作り話である。

史実は、慶応三年（一八六七）二度目の婿を迎えたが、この夫がらい病にかかったのは事実であるが、このために生活が困窮し博打に興じるようになった。東京に出て、ついで横浜に行った。この間、売春で生活費と夫の治療費を稼いでいたようである。夫は死没した後、生糸商人の妾となり、神田仲町に住んだが姿をくらまし、小川市太郎という者と同棲した。小川に生活力がないため、お伝は売春と借金に走り、返済を迫られて恐らくは売春の馴染み客であった古着屋の後藤吉蔵に借金を申し込み、蔵前の旅館に呼び出して殺害に及んでしまったのである。

高橋お伝が希に見る毒婦として明治初期の新聞を賑わし、仮名垣魯文がお伝処刑のわずか一ヶ月後にセンセーショナルにお伝一代記である「高橋阿伝夜叉」を出版して人気を博し、誇張された犯罪話が後々まで人々に伝えられ、信じられている。女性が殺人を行うというのは、当時は猟奇的に報道されるものであった。墓の方は、南千住駅に近い元・小塚原刑場近くにある回向院別院にある。

参考文献「日本風俗史学会編・明治の東京一〇〇話、つくばね舎」

⑥《大黒天》護国院——お釈迦様を安置した釈迦堂、護国院大黒天——

護国院の現存する本堂は釈迦堂とも呼ばれ、享保七年（一七二二）三月の再建。

護国院の所蔵する大黒天画像は三代将軍徳川家光から贈られたものと伝えられ、江戸時代に谷中七福神の一つとして信仰を集めていて「護国院大黒天」と呼ばれた。

東叡山寛永寺の最初の子院で、「東叡山釈迦堂」とも呼ばれた。

暗闇坂——真の闇となる坂——

江戸時代からの古道で、周辺には何もなく木立に囲まれ真の闇となり、不気味なところであった。

森鷗外旧居跡

台東区池之端三丁目三番二十一号

森鷗外は明治二十二年（一八八九）三月九日、海軍中将赤松則良の長女登志子と結婚し、その夏に根岸からこの地（下谷区上野花園町十一番地）に移り住んだ。

この家は、現在でもホテル（「水月ホテル鷗外荘」）の中庭に残されている。

⑦ 《弁天》 弁天堂——琵琶湖の竹生島にちなんで設置—— 台東区上野公園二番

寛永二年（一六二五）天海僧正（てんかいそうじょう）は、比叡山延暦寺にならい、上野台地に東叡山寛永寺を創建した。不忍池（しのばずのいけ）は、琵琶湖に見立てられ、竹生島（ちくぶしま）に因んで、常陸（ひたち、現茨城県）下館城主水谷（みずのや）勝隆が池中に中之島（弁天堂）を築き、さらに竹生島の宝厳寺（ほうごんじ）の大弁才天を勧請（かんじよう）し、弁天堂を建立した。

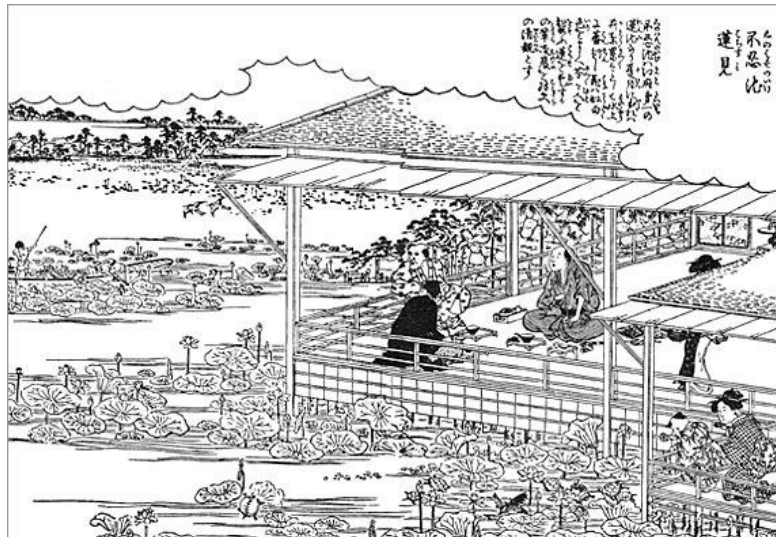
当初、弁天堂へは小船で渡っていたが、寛文年間（一六六一〜七二）に石橋が架けられて自由に往来できるようになり、弁天堂は弁天堂に参詣する人々や行楽の人々で賑わった。

弁天堂は、昭和二十年の空襲で焼失し、昭和三十三年九月に再建された。弁天堂本尊は、慈覚大師の作と伝えられる八臂（はつぴ）の大弁才天、児玉希望（こだまきぼう）伯による「金竜」の図が画かれている。また、本堂前、手水鉢（ちようずばち）の天井に、天保三年（一八三二）と銘のある谷文晁による「水墨の竜」を見ることが出来る。大祭は、九月の巳の日で、巳成金（みなるがね）という。

平成十年三月

台東区教育委員会

『江戸名所図会』不忍池 蓮見
（不忍池は江戸第一の蓮池なりと
記されている）



日本における洋風画の開拓
者・司馬江漢の不忍池図

谷中七福神巡り

一月一日から十日まで開催

